

春狐談

泉鏡花作

ばけかた

世の中の姉さんが様子の好いお世辭を謂つて人を
誑す、其の誑すのも對手に依つて、千變萬化の術が
あらう。此は甘茶だなど見取れば、惚れましたと
いつて事が濟む。怪物も其の通り、氣障な手つきを
して、もゝんがあ！ とやれば田舎漢はひツくり
かへるが、見當を違へて、水道尻へ引過に大入道に
なつて出て、おいらん怖いなあー などとやつ
て見る、直ちに、

ぬしたちも同じ仲間でありんやう

澤山化けておちを取らんせ

と高尾に引導を渡されなければならぬ。同じ手
間で土手へ行つて駕籠の棒先を押へて見なさい、手
もなくヒヤアというて倒れらあ、けれども其駕籠の

中に、親分が居ると、事が些と面倒だ、其時は又工夫があらう。

何にしる、振向いて、こんな顔、といつて目を剥いたり、舌を出したり、行方は大抵似て居るが、土地と人情、風俗に因つて些とづゝ違つて居る。詰り、かれた奴は誑し悪いと、姉さんがいふと一般、知識のある人間は甘手なことでは化し悪い、瓢箪を泳がせる河童の觀世物、小夜の中山夜泣石などでは木戸錢は取られぬ理合で。

けれども其の所謂だまし悪い奴なら、貴下のやうな方が何うして私の手に乗るもんですか、お氣の毒さまですよ、と恚ういふと、夫れ惚れました、とばかりより利目がある、も一ツ飛上つたら、死んでも可い！ とやる。其でも乗らずんば嗚呼止むことを得ず、癩を起すか。

男子こゝに於て、うそと知つても癩まで出したら祝儀を遣はして差支へあるまい。況や狐狸妖怪の類に於てをや、化け方がずつと進歩して、此の文明と

相並行したら、其處は江戸兒だ、買つてやるべし。

其處で、馭者臺の馭者の山高帽子が、彼のまゝす
ツと中天へ舞上つたり、其の馬車に乗つて女學校へ
成らせられる嬢様の鼻から氷柱が下つたり、芳原で
眞夜中頃、船を漕ぐ音が聞えたり、肺病の蟲の空を
飛ぶのが見えたり、進行中の汽車の屋根を駈けて歩
行く者が居たり、するやうなことになる、毎
日々々、人殺たの、やれ、詐欺だの、俳優が何うし
たのといふことばかりでなくなつて、新聞の種にも、
もつと面白い事が出来るではありませんか。恚うい
へば何をいふ、此のひらけたのに、誰が狐狸にたぶ
らかされる奴があるものかと言はるゝであらうが、
だまされてやるのも又意氣さ。

こゝに最も情ないのが一名あつて、婦人に振られ
ない工夫といふのを凝らした。何うするといふと、
何にも逆らはないで、優しくするのである。

右向け、ホイ、前へ進め、何でもいひなり次第に

なつて、人品骨柄天晴な床の番といふのをやつても、
東雲の幽霊が茫乎障子を開けて顯はれゝば、姐さん
お早うございますと、恚ういふ風。

剣道の極意、彼の無念無想の構とかいふのだが、
これぢやあ人間形なしだ、東海に魚あり、其名を海
月といはねばならない、其代姐さん調子よくやつて
おくれ。

曲線

人に悪感と美感を與へる線の作用があると聞いた。これは數理から割出したものださうで、鬼の頤を描く、きざ／＼の彼の榮螺のやうな線は、恐怖か、嫌悪か、いづれ悪感を與へるので、婦人の乳などを描く柔な線は、人をして美感を起さしむるものだといふ。髻へば鬼の頤の如き形は、茨の刺にあつても、蟹の甲にあつても、ひゝらぎの葉にあつても好い心持のものではない。之に反して、婦人の乳房、又足などは一ツ一ツ切放して、壁にかけてあつても悪くないものかも知れぬ。ほとゝぎすが杜若の紫の池で、片腕切落されたといつても、残酷な中に麗しい處がある。女の兒でも、錦繪は美しい姉さんの方が好いのであるから、此の感情は男女ともにかはりはあるまい。

して見ると異なる寸法といふのは、畜生ござりやあがつた線を物差で計つた時の言葉であらう。鼻の下の伸びたのは馬鹿げた線で、眉間の八の字は顰んだ線で、野郎の禪がぶらりと下ると、滑稽な線になる。

ものゝ不思議も、不氣味も、難有いのも、嬉しい
のも、羨しいのも皆此の線に依つて然りだとあつて、
彼處の町は、うすら淋しいといふのも失張此の線の
配合の様子に外ならず。

切支丹坂の下から茗荷谷を通つて大塚へ出ようと
いふ、人通の稀な細い道の丁ど中頃に、一本いやな
形の榎がある。

晝見れば何事も無いが、夜は月の時も暗がりにも、
何となく気がさして、必ず五七間此方で立停つて、
視められるのが例である。

幹の中央あたりから曲つて出て居る小さな枝だが、
何の所爲か、大な犬の頭に肖て厭な形。

見馴れて知つて居ても、何時でも引返さうかと思
ふ位ぼんやりこんもりとかたまつた、これが悪感を
引く幾百條の線の集合して居るのに違ひない。

行つて其樹の前まで近くと形が崩れ、傘のやうに

颯と擴がつて、何でもない。通越して茗荷谷の方から振返ると、梢がばら／＼になつて星もまばらに、葉の間、枝の中に見え透いて、些とも不思議はないのである。恚ういふことは何處でも間々あるであらう。

或時四五人が集つて、これまでに一番凄いと思つたのは、箱根の山を朝早く越した時だつた、と一人がいつた。

それは何うして、といふと、霧が晴れて行く中から、足許に見える山松が底も知れない谷へ、橋になつて生えて居る、其の一枝、凡そ七八間もあるだらうと思ふ、長く伸て然も細いのが谷の上へ葛かづらの一條もからまず、何にもない處まで差出て居た、其の突さきと思ふ所に、新しい草鞋が一足、二ツちやんと並べてあつた。

感應

感應といふのであらう。私が小児の時不思議な事があつた。田舎に居て、父は博覽會に出品したものがあつた。見物傍東京に出て居た留守、晩方のことで、ちやうどあかりを點した時、四歳になる妹の、縁側に居たのが、何かいつて駈けた拍子に石の上へ落ちて、頭を切つた。颯と血がはじいたのを見て、母があつといつて思はず聲を立てなすつた。

すると三日措いて、東京の父から手紙が来て、上野の宿坊に一室借りて居る、一昨日晚景、座敷の障子越、縁側で、御身があつといふのを、形は見ないで聞いたが、別條はなきや、案じ暮すとの一通、おなじ月おなじ日おなじ時。

少し趣は異なるけれど、恐しく雷の嫌ひな人は、其日朝あたりから豫め晩に鳴るのが分るつて、多くいふ處であるが、知己の者に、戀人から手紙の來るのを、つい一秒前に、今だなど、思つて悟ることが出来るのがある。何時かも庭へ朝顔を見に出ようと

して、片足おろしたがつつと氣がついて、衝と玄關
へ出ると、郵便、御存じより。紅葉先生の内の玄關
に一人、夜中の郵便物を一纏めにして配達を受取函
へ入れるのを、引出しながら暗がりて、手に觸る感
覺で、多くの中から、其故里の親のおとづれを分け
て取つて誤らないのがあつた。

眞言

燈へ蟲が来るのを、格別かくべつに厭いとがるのが、十二時前じせぜん後のことだつたさうで、洋燈ラムプの下したに書しよを開ひらいて讀よんで居ると、其それを防ふせがんだため、いくらか暑あついのを我慢がまんして閉切しめきつてある窓まどの障子しやうじへ、ざら／＼といつて飛とびついた蟲むしがあつた。音おとにもぞつとする位くらい、厭いやなのであるから、もしやこれが飛込とびこんだ日ひには怨靈をんりやうに取とり着つきかれたやうに座敷ざしきの中なかを立たつて逃にげ、居ゐて防ふせぎ、手てで拂はらひ、袂たもとで拂はらひ、ぢたばた狂くるひ廻まはらねばならぬ。丁ど書しよを讀よんで佳境かきやうに入いつて居ゐるのに、情なさけないと思おもふ内うちも、ばさり／＼と障子しやうじにぶつかる。たはしで擦こするほどの響ひびき、小ちひさな雀すずめで、もあらうと思おもはれて、益々ますます、恐おそしい。入いれてはならぬと一生懸命しやうけんめい、讀よんで居ゐた書ほんも是等これらのものであつたらしい。妙めうな考かんがへを持もつた少年せう年ねんであるから、整然ちやんぜんと坐すわつて、吃きつと向むかひ、眞言しんごんを稱となへて一心しんに印いんを結むすんだ。

別にこれが事ことを仕出して來かしたとも思おもはず、其まゝ又また机くゑに向むかふと、つい讀よみ惚ほれて果はては忘わすれて了しまつたのである。

やがて寝ようといふ時、其の外の雨戸をしめようと思つて、障子をあけると、敷居の處に、かたまつたものがある。いますらりと明けてい其者の骸にさはつたと思ふのに、蠱きもしないで、ぢつとして居るのを、灯をかゝげて見ると一疋の蝉。

それではと、氣がついたから、羽を抓んで掌へ乗せたが、下羽も振らず、もがき苦しんだやうに小さな足を寄せたまゝ冷くなつて居るのであつた。

何心なかつたのが、此體に吃驚して、今更驗のあるのに、我ながら氷を浴びたやうに悚然とするばかり。

これが、毒蟲でゝもあれば知らず、何の罪もないものをと、あはれになつた。けれども何とせむ、固より修行を積んだ神通があるのでない、はずみで無心にやつたこと。呪を解いて助けてやることが出来ない。とかくして思出したから、人知れず、あゝ飛んだことをしたつけ、蝉、蝉、おまへだと思へばこんなことにするのぢやなかつた。又いやな灯取蟲だ

と思つたもんだから、つい氣の毒なことを、堪忍し
ておくれ、もう可いから飛んで行かないか、とあり
のまゝ打あけて、それから靜に呼吸を吹かけると、
むぐ／＼動きはじめたが、這ふやうにして指のさき
まで、擦つたく歩行いたので、どき／＼しながらふ
るふ掌を、障子の外へ出すと、中庭で颯とたつて、
月のかゝつた棕欄の樹の梢に羽ばたきを聞いたとい
ふ。

【完】